

グローバルイシューを考える

国境を越えた「子ども食堂」の可能性：

フィリピン・マニラ市のスラム・トンド地区を例に

名前：LEONIDA RHANZEL LARIOQUE

所属大学：日本経済大学経済学部商学科

国、地域：フィリピン

1. はじめに

長年、世界は経済成長を遂げているにもかかわらず、各国は貧困問題を解決できていないとされている（World Bank, 2014）。経済成長は、世界各国において経済格差を生み出し、貧困は絶対的貧困（Absolute Poverty）から相対的貧困（Relative Poverty）となつて、先進国、途上国を問わず、経済成長によって引き起こされる相対的な貧困問題が課題（グローバルイシュー）となつているとされる。

日本も格差化は例外ではなく、子供の貧困は毎年、過去最悪の数値を更新し、看過できないレベルとなっている（World Bank Group-UNICEF, 2020）。筆者は神戸ユネスコ協会青年部の一員として、2021年8月以降、コロナ禍の神戸市において「子ども食堂」（神戸ユネスコ国際キッズカフェ）を年10回～15回計画し、開催してきた。私たちの神戸の「子ども食堂」では、留学生が母国料理を提供することが基本としている。具体的に、過去にはフィリピン料理、ベトナム料理、ネパール料理、ミャンマー料理、ウズベキスタン料理、セネガル料理、ウガンダ料理、モンゴル料理、ロシア料理、スリランカ料理、インドネシア料理、パキスタン料理、中華料理（吉林省料理）等をそれぞれの出身の留学生が作り、お店に足を運んでくれた子供たちに食べて頂き、同時に食文化を通じて外国の文化を紹介するのである。単に食事を提供するだけでなく、食を通じた国際交流を理解することを第一の目的としていた。

この活動は、神戸市から評価され、神戸市の推薦で 2021 年の神戸キワニスクラブ社会公益賞を受賞することになった（産経新聞, 2021 年 9 月 27 日；神戸キワニスクラブ, 2021）。

2022 年夏休み、コロナが一応落ち着きを見せたこともあり、私たちは神戸ユネスコ協会青年部、大阪ユネスコ協会青年部として「フィリピン SDGs 国際ボランティア」を計画した。神戸で行ってきた文化交流も含めた「子ども食堂」をフィリピンのマニラ市とラグーナ州でも実施することで、「グローバルイシュー」としてフィリピンのスラムの問題を認識することも目的であった。フィリピンでは、食事を提供しながら日本文化を伝えることになるが、私たちが神戸で開催してきた文化交流としての「子ども食堂」がフィリピンでも通用するのかを問いたいと考えた。なお、「子ども食堂」の経費の原資としては上記のキワニスクラブ社会公益賞の副賞（30 万円のうち 20 万円）を活用させて頂いた。

2. フィリピンの貧困の現状

フィリピン経済もグローバル化の例外ではなく、成長を続けている。2011 年の同国の GDP は 2,342 億ドルであるが、コロナ禍の 2021 年において 3,941 億ドルと飛躍している（World Bank, 2022b）。そして、この経済成長は、貧困を「解決」に向かわせているかのように見られることもある。例えば、世界銀行のデータによると、貧困ライン以下で生活しているフィリピン人は 2006 年の 26.6%と比較して、2015 年には 21.6% に減少している（Rappler, 2018）。事実、この数字上、貧困は残存するにせよ、「相対的」になっているのである。

しかしながら、フィリピンにおける貧困問題は現段階において「解決」には程遠い。人口が増加しているため、貧困に苦しむ家族の数は実数として増加しているのである（Rappler, 2018）。2006 年の同国の人口は 87,888,675 人であり、貧困ライン以下がその 26.6%であると約 2,338 万人となる、2015 年の総人口は 102,113,206 人であり、貧困ラインが 21.6% に減少しても、人口が増加しているため、貧困者数は約 2,206 万人とほぼ変わらない（World Bank, 2022a）。2021 年の総人口は 111,046,910 人であるが（ibid）、仮に 20%が貧困ライン以下とすれば、2,221 万人が貧困ライン以下であり、2015 年よりも総数で上回ってしまうことになる。フィリピンの貧困問題を考える際、GDP 増加や貧困ラインのパーセンテージだけに着目しても貧困者の増加を見落としてしまうのである。

より厳しい状況に目を向けると、Social Weather Stations (SWS) (2020)によれば、フィリピンでは800万人がスラムに暮らしており、そのうち220万人が飢餓の危機に直面しているという。教育と雇用機会の欠如、大家族、扶養家族の喪失が、これらの人々のほとんどが飢餓の危機に苦しむ理由となっている(Martinez, 2021)。

このスラムと呼ばれる地域では貧困の状況が明らかに見られ、現段階において人口の4,800万人以上が1日2ドル未満の生活をしており、食費は家計支出の50%以上を占めている(Chua et al., 2018)。食品を購入できないため、過酷な生活環境においてサバイバルするために、栄養価の低い食べ物や、様々なレストランやファストフードからの残飯を食べざるを得ない。それらは経済的困窮者の食べ物と考えられ、一般に「パグパグ」と呼ばれている。それはフィリピンの言葉で「残飯の食べられる部分の汚れを振り落とす行為」を意味している。

スラムに暮らしている人々には、独自の生活習慣がある。残飯で生き残るため、主に2つの活動が行われているのである。1つ目は単なるゴミから残飯を収集し、食べられる部分と既に腐った部分を分別する。家族の空腹感を満たすために、これらの人々が収集した残飯は洗うや再加熱もせずに家族に提供することもある。残りの残飯は、全体の量や肉が残っているかどうかによって、20ペソから50ペソ(約50円—125円)の価格で外部に販売する。2つ目は他人が収集した残飯を購入し、再調理することである。フィリピンでは、肉に付いている細菌や汚れなどを取り除くために、よく洗って、何回も加熱する必要がある。その後、料理した残飯をビニール袋に入れ、10ペソから20ペソ(約25円—50円)まで一般の人に販売される。(GMA Public Affairs, 2020)

フィリピンの貧困層は、同国が経済成長を遂げる中、いまだに残飯と共に生活しているのである。

3. フィリピンでのフィールドワーク

厳しい現状の中で、私たちが神戸で行ってきた「子ども食堂」の方法はどこまで通用するのであろうか。活動の対象として、フィリピンのマニラ市ではトンド地域を選んだ。その理由は同地区がマニラ市を代表するスラム街であるからであった。

2022年9月8日、同地区で活動する Project Pearls Organization という NGO に協力を頂きながら、同地区の約 500 人の子供を対象に「子ども食堂」を開催することにした。私たちは、神戸ユネスコ協会青年部、大阪ユネスコ協会青年部の有志 9 人であった。日本出身 5 名、フィリピン出身 2 名、ウズベキスタン出身 1 名、ベトナム出身 1 名であり、私たち自身が多国籍チームであった。

マニラ市のトンド地区には朝 8 時に現地に出向いたが、悪臭が鼻を襲い、下水が地面を流れ、靴は直ぐに真っ黒になり、予想を超える状況であった。食事はご飯、ビーフン、春巻き、シュウマイ、リンゴやバナナなどを子供たちが好きなメニューにした。計画当初において日本食の提供も案としては出たが、子供たちが好きな食べ物が一番喜ぶのではないかということで NGO と相談した上で、上記のメニューとなった。靴がなく裸足できた子供たちも少数ながら存在した。結果として、子供だけではなく、子供の両親や大人も食事を受け取りに来た。

食事の後、100 人の子供を対象に「国際理解教室」を開催した。具体的には、子供たちに日本語の挨拶を教え、日本の生活を伝えた。皆、元気に「おはようございます」「有難うございます」「さようなら」と言えるようになった。そして、子供たちは、日本の新幹線の紹介などは拡大した写真を食い入るように見入っていた。最後に、「折り紙」で鶴の折り方を伝え、皆で悪戦苦闘しながら鶴を折った。恐竜に見えるようで、男の子に大人気だった。

数時間があつという間に過ぎ去り、お別れの時間が来た。子供たちは、私たちに覚えてたの日本語で「さよなら！」「ありがとう！」と何度も声をかけてくれた。往路で感じた悪臭は全く感じなくなっていた。私たちは数日後に同様の「子ども食堂」と「国際理解教室」をラグーナ州でも貧困層 100 人の子供を対象に行った。

4. 結論

私たちは、日本（神戸）で行ってきた国際理解を目的とした「子ども食堂」を、フィリピンで実施した際、同じような効果が得られるのかどうか問われた。現実としては、質的調査も量的調査も十分ではないと言える。フィリピンでの 2 回の子ども食堂が、現段階では子供

たちにどれほど影響を与えたか、社会的なインパクトがあったのかどうかを明確に把握することはできない。

しかしながら、実感としてあることはスラムの子供たちが笑顔に溢れていたことである。そして、私たち日本から参加した学生（多国籍チーム）も非常に楽しかったことは事実である。笑顔や楽しさの量は「科学的な数値」ではないが、貧困が不幸であるとすれば、楽しさ＝幸せを増やすことは十分に貧困対策となるだろう。厳しい現状を把握すれば、日本の「相対的貧困」とフィリピンの「貧困」を同列には並べられない。フィリピンの場合は、完全に「相対的」と言えない状況があり、「絶対的貧困」性が否定できないからである。

それでも、今回のフィリピンにおけるフィールドワーク活動によって、日本とフィリピンの貧困対策の共通性を見出せたと考える。それは、貧困層の子供たちにおいても「人はパンのみにあらず」であり、人と人の交流は貧困対策として大きな役割を担う可能性があるということである。それが、今回のように多国籍チームによる国境を越えた交流の場合、更に効果的であると考えられる。

参考文献

神戸キワニスクラブ（2021）“神戸キワニス社会公益賞の贈呈”， Available at:

<http://www.kobekiwanis.jp/topics/koekisho.html>

Chua, C., et al. (2018) “The Perceived Impacts Of Alternative Food Source* (“Pagpag”) On Selected Families Of An Urban Poor Community In The Philippines” . *Journal of Social Health*. February 2018, pp.80-88.

De Leon, D. (2022) ” SWS: 2.9 million Filipinos stay hungry in October 2022” . Press Release, October 29, 2022

GMA Public Affairs (2020). “Reporter’s Notebook: Tira-tirang pagkain o pagpag, bumubuhay sa mahihirap na pamilyang Pilipino” . Retrieved from: <https://www.youtube.com/watch?v=UyInDE0o9Vk&t=253s>

Martinez, E.A. (2021) "The Tirtir Economy: An Ethnography of Food Recycling among Older Adults in an Urban Informal Settlement" . *Journal of Social Health*, 4(1).

Rappler (2018) "PH economy growing but poverty still high - World Bank" , Press Release, May 30, 2018. Available at: <https://www.rappler.com/business/203680-economy-poverty-rate-philippines-world-bank-report-2018/>

World Bank (2014) "Ending poverty requires more than growth, says WBG" , Press Release, April 10, 2014.

World Bank (2022a) " Population, total - Philippines - World Bank Data" , Available at: <https://data.worldbank.org/indicator/SP.POP.TOTL>?locations=PH&most_recent_year_desc=false

World Bank (2022b) " World Bank national accounts data, and OECD National Accounts data files, Available at:

<https://data.worldbank.org/indicator/NY.GDP.MKTP.CD?locations=PH>

World Bank Group-UNICEF (2020) "1 in 6 children lives in extreme poverty, World Bank-UNICEF analysis shows" , Press Release, October 20, 2020